

博士論文の内容の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 Bravo Kohatsu Jose Raul (小波津ホセ)

忘却されてきたペルー人研究には、出稼ぎ現象が開始してから約 30 年が経過する中で、多数派集団と比較してペルー人に対する研究が実施されてこなかったこと、継続的な研究が実施されてこなかったことが含意されている。本稿では、ペルー人の子どもと親の合計 71 人を対象に調査を実施した。子どもの生活世界である家族、学校、地域に焦点をあて、日本社会およびペルー社会で生活するかれらを学歴別に選出して進学・非進学、そして社会参入に与えた影響の分析を目的とした。親の生活世界についても言及することで子どもの成長について理解を深めている。

本稿の特徴は 3 つある。まず、縦断的研究として成人したペルー人の子どもが過去をふりかえり進学等の各局面で受けた影響を探求して、数年後に追跡調査を実施していることである。継続的な調査を実施することで生活の変化を捉えている。次に、学歴別に選出することで進学・非進学の要因分析を行い、最終学歴後の社会参入に言及している。高等教育に進出来た限定的な集団に捉われず、異なった進路や社会参入に着目している。そして、親子双方の視点で聞き取り調査を実施することで、親子関係や地域が進学・非進学、社会参入に与えた影響を分析している。成長過程において親または地域の役割の重要性にふれている。

本稿の主張は五点ある。第 1 に、コミュニティ形成・特徴および子どもに対する影響は移住過程から着目する必要がある。移住過程の相違による特定集団の集住度合いやコミュニティ形成は移住した集団のネットワークに影響を与えるだけでなく、子どもの文化・言語にも影響する。第 2 に、ペルーへ帰国した若者は年齢および日本から持ち込んだ資本によって生活適応に差異がでる。日本語という人的資本、親戚との社会関係資本と就職への機会構造が成人した若者がペルー社会で生活する上で重要である。第 3 に、進学・非進学の規定要因には地域を含んだ親子関係とピアグループが関連している。従来の研究で言及されてきた親の学歴や経済的状況も必要だが、それ以外にも家族、地域との関係性も重要である。第 4 に、ペルー人の社会参入に学歴が重要な要因である一方、高卒以下の人には「言語能力」と「アイデンティティ」が社会参入において重要な人的資本になり得る。加えて、この人的資本の獲得や維持の方法が重要である。第 5 に、社会参入後の「継続性」は重要で、親と異なった社会的地位を獲得するには日本語能力も重要である。日本での長期居住は必ずしも一定以上の日本語能力を保障するわけではない。

7 章に分類される本稿は、序章で先行研究や概念を整理して日本社会の変遷の概観、ペルー人の位置づけを明確にして、分析枠組みを提示している。また、本稿の重要概念となる社会関係資本も整理している。第 1 章では、ペルー人の来日において重要な役割を果たした栃木県真岡市に焦点をあて、移住過程、社会関係資本の構築過程およびコミュニティ形成までの経緯・経験を聞き取り調査からまとめている。第 2 章では、学歴別に選出した 16 人のペルー人に焦点をあて、最終学歴と職歴の関係性について分析している。学校と地域を主要因として分析していること、そして 5 年後に追跡調査していることも特徴である。第 3 章では、一定期間日本で生活してからペルーへと帰国した 12 人の成人したペルー人に焦点をあて、帰国までの経緯やペルーまたは日系社会への参入経緯をまとめている。かれらの社会参入には人的資本、社会関係資本と機会構造が重要な位置づけとなっており、3 年後の追跡調査ではペルーまたは日系社会における帰属意識によってかれらの人生に変化が見られた。第 4 章

では、ペルー人 13 家族に焦点をあて親子に聞き取り調査を実施した。家族社会関係資本と地域社会関係資本に焦点をあて、親子間の使用言語と地域との関係性を分析して子ども集団を 4 分類している。それは、「文化理解会話困難集団」、「文化無理解会話困難集団」、「文化理解会話容易集団」と「文化未理解会話容易集団」であり、各分類において言語の習得度合いと同胞との関係性によって親子間に問題が生じるだけではなく、社会参入における特徴や人的資本においても異なった影響がみられる。第 5 章では、学歴別に選出した 30 人のペルー人の子どものみに焦点をあて、社会参入までの経緯を第 4 章の 4 分類にふれながら言及している。子どもの進学・非進学と社会参入には自助努力や制度的な支援以外に学校や地域の仲間関係、家族における親子関係や親の社会関係資本が重要な位置づけとなっている。そして、最終章では、既述の本稿の主張、成功者に対する考え方および忘却されたペルー人研究の意味にふれている。成功者とは、必ずしも高等教育修了後に社会参入した人に限定されず、苦勞して地位上昇した人も必ず存在し、多様な生き方が求められる現代で焦点があてられるべきであることを主張した。

論文審査結果の要旨

専攻名 国際学研究専攻

氏名 Bravo Kohatsu Jose Raul (小波津ホセ)

1. 審査概要

(1) 予備論文審査

学位請求のための予備論文「忘却されてきたペルー人研究～家族、学校、地域と社会参入～」に対して、国際学研究科教員の審査委員5名および学外審査委員1名からなる予備論文審査委員会が設置された。国際学研究科教員5名による予備審査委員会は2019年10月16日に開催された。学外審査員からは別な形で評価とコメントを得た（2019年10月16日）。

予備審査委員会では、まず、博士論文としての水準を学会誌への掲載と分量により確認した。予備論文提出までに学会誌に掲載された論文は2編あった。「ペルー第2世代の学歴と職歴の関連性：学歴別16人の語りから」（『アジア・アフリカ研究』（58）4、2018年、37-58頁）。「親子関係がペルー第2世代の社会進出に与える影響の検証：在日ペルー人5家族の経験」（『2017年度JICA横浜海外移住資料館研究紀要（12）』2018年、67-85頁）。

予備論文は、以下の3点が特に評価された。

○課題設定、概念整理、先行研究の整理・検討が十分になされている。

○学歴別のサンプリングを行い、追跡調査も実施し、親子をも対象とするインタビュー調査を丁寧に行った点が評価される。

○学校、地域社会、親の学歴などを別々に分析するのではなく、社会関係資本総体が移民二世の進学やキャリア形成に及ぼす影響を分析しようとする点にオリジナリティーがある。

一方で、論文の水準を上げるためには、特に以下の改善が必要であると指摘された。

1 曖昧・不要な記述、繰り返し、主観的表現等を修正する必要がある。

2 高等教育に進学するだけが「成功」に至る選択肢であるかのような議論への違和感を表明しているのだから、他の選択肢を選んだ者のライフコースについてもっと詳しく書いたほうがよい。日本人生徒の進学／非進学の規定要因に関する先行研究も参照すべき。

3 社会参入と諸要因の関係の分析結果について、結論部分でより明確に加筆・修正する必要がある

以上を総合した結果、学位論文の審査請求に値するという合意が全員一致で得られた。

(2) 学位論文審査

学位請求論文の提出を受けて、予備論文審査委員会と同じ構成員6名からなる学位審査委員会が設置され、2020年1月23日に、第1回委員会、口述による最終試験、第2回委員会を実施した。

1) 第1回学位審査委員会

予備論文審査において指摘された改善事項を確認した結果、いずれも改善が認められ、最終試験を行うことで全員が一致した。

2) 最終試験

最初に小波津ホセに対して本論文がどのように改善されたかを中心に説明を求めた。小波津ホセからは、改善事項に対する加筆・修正点として以下の説明があった。

1の指摘については、曖昧・不要な記述、繰り返し、主観的表現等を全面的に見直し修正した。2の指摘については、高等教育修了者の「成功者」とは異なる「苦労人」の「成功者」について加筆し、学歴が低くても語学力や継続的な努力で「成功」に至った者もいるというパターンをより明確に示した。3の指摘については、終章で本論文の「発見」と「主張」を5点にまとめ直すことで、社会参入と諸要因の関係をより明確に示した。

その後で、質疑応答を行った。予備論文で改善事項として指摘された箇所について、再考や修正に工夫された跡がうかがえるとともに論文構成（序章から終章のまとめ）が体系的に整理されていることが確認された。

3) 第2回学位審査委員会

論文審査および最終試験での小波津ホセとの質疑応答の結果から、博士後期課程の論文評価基準に照らして、学位論文〔博士（国際学）〕の要件を満たしているとの結論に達した。

評価される点。

- ・問題意識が鮮明、課題設定が明確である。
- ・数多くの対象者に精力的な調査を継続して行い、時間をかけて丁寧に取り組んだ労作である。
- ・学歴と社会参入の関係について、学校・地域・家庭の様々な要因や資源を考察することで、オリジナリティーを担保している

なお、今後の研究に対する課題・期待として、以下の指摘があった。

- ・ 詳細なライフコース研究を行う。
- ・ ペル一人研究の社会的意義をより明確に主張していく。
- ・ 理論的な分析力を鍛え、理論構築や政策提言に貢献できる研究に発展させる。

2. 審査結果

合

・